

# トマス・アクィナスのイデア論に就いて

— キリスト教哲學のイデア論研究の一部分 —

川 田 熊 太 郎

## 目 次

### 緒 論

1. トマスのイデア論
2. 彼のイデア論の系統
3. 彼のイデア論の實體
4. ヒュベル・ブューシズムの形相主義
5. ディオニューシウスの問題

### 結 論

## 緒 論

此の小論はトマス・アクィナスのイデア論を解説しようとするものではなく、むしろ之を廻りて彼のイデア論が提出している二三の問題を考察するものである。廻るとはその周邊を明かにすることでもあるが、またそれは周邊から中心を観察することでもある。而して廻るが爲には中心が定められなければならないから、此の小論は此の中心を定めることから始められる。

### 1. トマスのイデア論

トマスにイデア論が有るかとの問には肯定的に答えられる、というのは、彼は、少くとも『破異教徒綱要<sup>(1)</sup>』と『眞理に就いて<sup>(2)</sup>』と『神學綱要<sup>(3)</sup>』との

(1) S. c. G., I, 54.

(2) Quaest. Disput., volumen I. De Veritate, Qu. III.

(3) S.Th., I, Qu. XV.

うちで、殊に後の二著に於ては「デー・イデイス」なる問題を立てて詳細にアイデアを論じているのであるから。その彼のアイデア論に就いて見るに、プラトーンの哲學體系に於て彼のアイデア論が如何なる位置を占めているかは大なる問題であるが、トマスは彼の神學體系に於けるアイデア論の位置をみずから明確に定めている。神學は第一に神に就いて、第二に有理性的被造物が爲す神への運動に就いて、而して第三に神へ到る我々の道たる Kristus に就いて論ずる<sup>(4)</sup>。之を『神學綱要』の第一部、第二部及び第三部が果している。而して神に就いての論攻は神の實有 *essentia* に關する事どもと、諸位格の區別に關する事どもと、神そのものによる被造物の現出とを此の順序で取扱う。而して神の實有に就いては第一に神は有るか、第二に神は如何に有るか、否、むしろ如何に有らぬか、而して第三に神そのものの能働に關する事ども、即ち彼の知識と意志と能力とに關して考察しなければならぬ<sup>(5)</sup>。トマスのアイデア論は此の神の能働の一つたる知識に關する考察のうちに位置している。即ち能働には能働者の内部に止まるものと外部の結果へ現出するものとがあるのであるが、知識と意志とは内部に止まるものであるので先ず是れが考察せられる。然るに知るとは生きることであるから神の生命が、また知識は眞なるものどもに關するのであるから眞理と虚偽とが考察せられるのであるが、また他面に於て認識せられたものは總べて認識する者の内に有るのであり、而して諸事物の認識理由 *rationes* は認識者たる神の内にある限に於て諸のアイデアと呼ばれるのであるから神の知識の考察には其等のアイデアに就いての考察がまた加えられなければならぬのである<sup>(6)</sup>。以上によつてトマスの神學體系に於て占めるアイデア論の位置は明白であらう。然らば、そのアイデアに就いて彼は何を主張しているのであるか。

(4) S.Th., I, Qu. II.-Introductio.

(5) Ibidem.

(6) S.Th., I, Qu. XIV-Introductio (Praefatio).

第一にイデアは知性 *intellectus* たる神の内即ち神の心 *mens* の内に有らねばならない。<sup>(7)</sup>ギリシア語のイデアはラテン語のフォルマ（形相）であるが、是れは現存している物を超越して有る物の形相である。而してイデアは、第一に、それが其物の形相であると言われる所の物の範型 *exemplar* たる、第二に、其物を認識することの原理たるとの二義を持つている。というのは、第一に、偶然によりて生成するのではない物の總べてに於ては形相が各々の物の生成の終局目的であらねばならないから。ところで、第二に、能動者は形相が彼自身の内に有る限に於て形相に依りて能動するのであるから。然るに、第三に、或る能動者の内には生成する物の形相が自然的存在 *esse naturale* の見地から前もつて有るのであり、或る能動者のうちには所知的存在 *esse intelligibile* の見地から前もつて有るのであるからである。即ち此の宇宙は偶然に依りて生成したものではなくて、神によりて能動的知性をもつて創造せられたのであるから、神の心の内に形相があるのであり、而してそれと相似するように此の宇宙が作られたのであらねばならぬ。正に此の點にイデアの存在理由が存するのである。

第二にイデアは多數であらねばならない。<sup>(8)</sup>此の事は任意の結果のうちに終局目的たるものが第一の能動者によりてそれぞれ置き入れられている事から明白となる。諸物のうちに現存する最善なるものは宇宙の總體の秩序という善である。それ故に此の宇宙の總體の秩序なるものは正に神によりて置き入れられているのである。然るに或る全體の認識理由は其全體を構成する所の諸部分それぞれの認識理由が持たれることによりて持たれるのである。それ故に神の心のうちに總べての物どもの認識理由があらねばならぬこととなる。即ち神の心のうちに多數のイデアがあることとなるのである。しかし此のイデアの多數性は神の單一性と矛盾するものではない。

(7) S. Th., I, Qu. XV, art. 1. Cf. De Ver., Qu. 3. art. 1.

(8) S. Th., I, Qu. XV, art. 2. Cf. De Ver., Qu. 3. art. 2; S. c. G., I c. 54.

作られたもののアイデアは作者の心のうちに認識せられた物としてあるのである。例せば、家の形相は建築家の心のうちに彼によりて認識せられたものとしてあるのである。然るに神が多くの物を認識するという事は神の知性の単一性と矛盾しはしない、若し神の知性が多くの形相によりて形成せられると言うのであれば、それは神の知性の単一性に矛盾するのであるが。それ故に多くのアイデアは神の心のうちに彼自身によりて認識せられたものとして有るのである。と言うことの意味は次の通りである。神はみずから彼自身の實有を完全に認識する。それ故に彼は彼の實在をば是れが認識せられうる仕方のあらゆる仕方によりて認識する。然るに彼の實在は唯單にそれ自身に於てあるがままに認識せられうるのみならず、またそれぞれの相似の仕方によりて被造物によりて分有せられうるという仕方でも認識せられうる。然るに被造物はその何たるを問わず、或る仕方では神の實有の相似性を分有しているに従つて、それぞれの形相をもっているのである。それ故に神は、或る性質の被造物によりて模倣せられうるものとして彼自身の實有を認識する限に於て、此の彼の實有をばその被造物に特有なる認識理由即ち、アイデアとして認識する。これはいずれの被造物に就いても言われうることである。それ故に明かに神は多くの物に特有なる多くの認識理由を認識するのであり、その多くの認識が即ち多くのアイデアなのである。

第三に神が認識する限りの總へての物どものアイデアが有るのであらねばならない<sup>(9)</sup> アイデアはプラトーンによりて諸物の認識と生成との原理として立てられたのであるから、此の認識と生成との双方にアイデアは關係する、それが神の心のうちに立てられる立てられ方に従つて。而してアイデアは、諸物の創造の原理である限に於て範型 *exemplar* と呼ばれるのであつて、行爲的認識に所屬する。しかしまたアイデアは、認識の原理である限に於て特に認識理由 *ratio* と呼ばれ、而して觀照的知識にも所屬することができる。それ故にアイデアは、範型である限に於ては、神によりて時間の内に於

(9) S. Th., I, Qu., XV, art. 3. Cf. De Ver., Qu. 3. art. 3.

て生成する限りの總べての物と關係する。またイデアは、認識の原理たる限に於ては、神によりて認識せらるる限りの總べての物と關係する、よしや其等が時間の内に於ては全く生成しなくとも、即ちイデアは神によりて夫々の物に特有なる認識理由に従いて認識せられる限りの、また彼によりて觀照の仕方て認識せらるる限りの物どもと關係しているのである。なお此の第三の點に就いての諸限定即ち惡のイデア、第一質料の、現に有らぬ所のもの・未だ有らぬ所のもの・既に有らなかつた所のもの、偶有性の、單一なるものどものイデアに關しては『眞理に就いて』の第四乃至第八項<sup>(10)</sup>を見られたい。

トマスのイデア論はその要點に就いて見れば右の通りのものであるから、之を中心として廻るとき、またその周邊から此の中心を觀察するときには實に多くの事どもが言われうる。それ等のうち差當りて私が關心する二三の點を以下に於て論述するであらう。

## 2. 彼のイデア論の系統

右の中心を定める考察は體系論的なものであつた。故に續いてその歴史的考察がなされなければならぬ、私は特に之を系統論的考察と名づける、というのは此の考察は神學者たる彼の神に就いての主張の重要なる部分である所のイデア論という思想の生命の連續に關するもの、所謂血脈に關する考察であるから。

此の見地から見るとき、アウグスティヌスが先ず擧げられなければならぬ、というのはトマスがイデアを肯定する場合の第一の直接の根據は、『眞理に就いて』<sup>(11)</sup>に就いて觀るも亦『神學綱要』<sup>(12)</sup>に就いて見るも、アウグスティヌスであり而して彼の『83問題集』<sup>(13)</sup>の第46問題であるから。勿

(10) De Ver., Qu. 3. artt. 4-8.

(11) De Ver., Qu. III.

(12) S. Th., I, Qu. XV.

(13) Oeuvres de Saint Augustin, 1<sup>re</sup> Série, Opuscules, vol. X, p. 122et sqq. Desclée, Paris, 1952.

論『神國論』の箇所も考察に入れられている。<sup>(14)</sup> 次いでディオニューシウス・アレーオパギータが挙げられなければならぬ、というのはトマスはアイデアが肯定せられ定立せられるべき依處の一つとして此のディオニューシウスをも挙げている<sup>(15)</sup>のであり、またトマスは「彼に極度に依頼している」<sup>(16)</sup>のでもあるから。またプラトーンが挙げられなければならぬ、というのはトマスはアウグスティヌスに依りてプラトーンを以てアイデアの創唱者とすると共にプラトーンが此のアイデア論を以て偶然や自然の必然によりて總べての物が生成すると説く哲學者達を斥ける點を強く肯定しているからである。しかしトマスはプラトーンがアイデアを神の心の外にありとする點などには強く反対している。最後にアリストテレスが前景へ押出されねばならぬ、というのは知性たる神が單に自己自身を認識するのみではなくて、また自己自身を認識する事によりて自己自身より以外の物どもをも認識する事の根據をトマスはアリストテレスに求めているのであるから。しかも<sup>(17)</sup>此の場合に神が自己より以外の物どもを認識するのは彼の心の内なるアイデアに依りてなのである。

斯くの如く系統論的に考察すれば、トマスのアイデア論はプラトーンに始まると見られ、アリストテレスによりて繼承せられると共に修正せられ、アウグスティヌスによりてキリスト教の神の心又は知性 *intelligentia* の内に在ると決然として主張せられ、而してディオニューシウス・アレーオパギータによりて更に深くキリスト教の神と結合せられたるイデテ論の繼承であり展開である。故に彼の此のアイデア論の系統に就いては多くの事が言われうる、既に早くアレクサンドリアのフィロンが思惟せられうる宇宙 *ho noētos kosmos* と神の言葉 *theou logos* とを同一なりとし、之を以て

(14) De Ver., Qu.3. art.1.

(15) Ibidem.

(16) Quaest. Disput., volumen I, cura et studio P.Fr. Raymundi Spiazzi, O. P., editio VIII revisa, p.7 b. Marietti Taurini et Romae.

(17) Sancti Thomae Aquinatis In Metaphysicam Aristotelis Commentaria, Liber XII, Lectio XI, §§ 2613-2616.

モーイセースの意見であるとした事<sup>(18)</sup>などを始めとして。しかし特に注目せらるべきは彼の此のイデア論の系統からプロティノスとヨハンネース・エリュージェナが除外せられている事である。というのは、トマスはプロティノスの學説に論及しているが、しかしそれはイデア論の聯關に於てではない<sup>(19)</sup>から、またヨハンネース・エリュージェナに關しては私の知り得た限りでは全く何をも論じていないのであるから。第 13 世紀のトマスが此のアイルランド生れのヨハンネースに就いて論じなかつたのには特殊の教會的事情があつたのであろう。その限では諒とせられなければならないが、しかし若しキリスト教哲學に於けるイデア論という事を言いうるとすれば、此の二人がトマスのイデア論の系統から除外せられている事は看過せられえない大なる事實である。

### 3. 彼のイデア論の實體

さて然らば、右の如き思想系統の荷負者であり、而してイデア論を右の如くに彼の體系の内に位置せしめている彼のイデア論の實體或は本質は何であろうか。

此の間に答えるが爲に我々が先ず第一に注意すべき事は彼が「普遍的眞理の教師」<sup>(20)</sup> *catholicae veritatis doctor* として進歩している者をも初心者をも教える立場からして、また知慧を有する者の義務<sup>(21)</sup> *officium sapientis* として神の眞理を善く研究して言表はし而して此の眞理に反する誤謬を攻撃すべき立場からして「有て在る者」たる唯一の神を主張する者である事である。此の神は、第二に、知性又は理性 *intellectus* であり而してあらゆる意味に於て一切のものの原理であり始元であらねばならない。それ故に

(18) *Philonis Alexandrini De Opificio Mundi*, §§ 24 et 25.—*Philonis Alexandrini Opera*, editore Leopoldus Cohn, editio minor, vol. I, pp. 5 et 6.

(19) *Ex. gr. De Ver. Qu.26, art.8 ad secundum.*

(20) *S. Th., I, Prologus.*

(21) *S. c. G., I, c. 1.*

第三に、イデアは此の唯一神の心又は知性の内にあるべくして決して其の外にあつてはならないのである、というのは、若し外に在りとすれば、此の知性たる唯一神が彼から獨立なる此のイデアという對象によりて完成せられるという誤謬を生ずるからである。また従つて、第四に、此の形相たる多くのイデアを此の神は一切の物を認識する事によりて後から得るのではなく、一切の物即ち一切の被造物の虚無からの創造よりも前から、彼の「實有として」*ut essentia* ではなくて、「認識せられたる實有として」*ut (essentia) intellecta* として持つてゐるのである、というのは彼は「自己自身の認識」*cognitio suiipsius* を本質とする所の「純粹活動」*actus purus* の神であつて、此の彼の自己認識の極めて豊富なる内容のうちには彼が創造する三位一體であり而して被造物によつて「分有せられうるもの」*participabilis* であるという事も含まれているからである。それ故に、第五に、此の唯一神は唯一なる而して純粹なる形相即ちイデアであつて、しかも彼は創造者であるのであるからして總べての被造物のイデアを諸限定としてもつてゐるもの、即ち「あらゆる限定をもつてゐる所の唯一者」*omnimoda unitas* である。而して、第六に此の唯一神は全くの超越者である。此の事を我々は、トマスに關しては、ヨセフ・グレットに依りて「神は宇宙から區別せられたる存在である<sup>(22)</sup>」と言わねばならぬ、というのは、少くとも一つには、若し此の超越性を誤解すれば、極端なる否定神學に陥るからであり、而して是れはトマス神學の性質ではないからである。以上の他になお多くの理由を擧げる事ができるであろうが、少くとも右の六箇の理由によりて我々は當面の問題に答える事ができる。即ちトマスのイデア論の實體又は本質に就いて言えば、それはカトリック・キリスト教たる唯一神論の立場からのイデア論たる點に存するのである。

それ故に、我々には續いて、右の系統論的考察との聯關に於て、直ちに

(22) Gredt, Josephus: *Elementa Philosophiae Aristotelico-Thomisticae*, vol. II, p.225. Barcelona 1951.



二三の問題が起つて来るのである。それ等のうち當面の間に直接の關係の有るもののみを考察しなければならぬ、考察の歩みが多岐にわたらぬが爲に。而してその問題は、ヨーロッパ哲學史の見地よりすれば、トマスのイデア論の系統に關して重大な意義をもつている所のプラトーンとアリストテレースとがカトリック・キリスト教よりも以前の人であつたという事とイデア論の創唱者がトマスによりてアウグスティヌスに從つてプラトーンであるとせられている事とからして起つて来るのである。即ち、第一に、プラトーンとアリストテレースとは宇宙から區別せられたる存在である所の或は宇宙を超越せる而して創造する所の神を知らぬ者であつて、そうして共に創造せられたるには非ざる宇宙を常恒なるものであるとし而して之を、彼等は古代ギリシヤ人であつたので、常恒に生き續けて行く自然 *physis* として把えているのである。第二に、プラトーンがイデアと呼ぶもの而してアリストテレースがその師を修正してエイドスと呼ぶものは遂には此の自然に歸着する所のものなのである。而して此の自然たるイデア又はエイドスは更にまた自然と呼ぶるもう一つの原理たる質料 *hylé* i. e. *materia* とは異なるものである。故に二人は共に二元論者と呼ばれる。しかし共にイデア又はエイドスをより重きものと考えているので、形相主義者 *Idealist* と呼ばれるのである。私は此のイデアリストと言う呼稱に代えるにエーティスト *Eidetist* というのを以てしたい、というのは、イデアリスト、從つてイデアリスムスと言う術語は嚴密を期するが爲には餘りにも多義であり、而してその多義性のうちにはキリスト教的イデアリスト及びキリスト教的イデアリスムスの意味も含まれているからである。かくて此のエーティストたるプラトーンとアリストテレースとは右の如くに彼等のイデア又はエイドスをプーシスたる自然なりと考え而して主張しているのである。故に彼等のイデア論の内に如何にカトリック・キリスト教に取りて願わしきものが含まれていようと、彼等のイデア論は見紛うべくも無く明瞭に古代ギリシヤ人のプーシズムのイデア論であり、而して彼等の

イデア論は彼等の手によりて把えられたる其のプューシズムそのものなのである。即ち彼等のイデア論はキリスト教の神を知らぬ古代ギリシア人のプューシズムが彼等を通じて自己を形成し表現した所のものである。それ故に、第三に、此の二人のイデア論は明かにトマス及びアウグスティーンスのイデア論よりも前から歴史的に存在していたものであり而して此の前から存在していたイデア論は後に現われたトマス及びアウグスティーンスのイデア論とはその根本性格を全く異にしていたものである。というのは創造する神を未だ知らずして、常恒なる自然を原理とする立場と「有て在る者」たる創造する所の唯一神を原理とする立場とは、表面的に類似するものを共にしていようと、人間的に普遍的なるものを共にしていようと、原理的には全く異なるもの、歴史的に普遍的なるものに関しては全く異なるものと言われなければならぬからである。是等の他にもなお多くの理由を挙げうるが、差當りては少くとも以上の三箇の理由によりて我々はトマス及びアウグスティーンスのイデア論をば、それよりも前から存在していた所のプラトーン及びアリストテレスのイデア論がキリスト教の唯一神論の立場から解釋せられ而して其れの主張の重要な一部分として取入れられたるもの、と考え而して言わねばならぬであろう。而して此の解釋と取入とはオーリゲネースなどのアレクサンドリーネルの貢獻が大であるが、之を決定的なものとしたのはアウグスティーンスである。勿論、今茲で私は此のアウグスティーンスのイデア論を立入つて論じようとは思わないが、しかし彼のイデア論と言う時に私が立論の資料として眼中に置くのは『83問題集』の第46問題、『神國論』第7巻第28章、同所第8巻第4及第11章、同所第8巻第9第10巻、『眞なる再結に就いて』De Vera Religioneなどである。トマスのイデア論は此のアウグスティーンスによりて決定的なものとなせられたるプラトーン及びアリストテレスのイデア論のテイスティッシュなる、即ち唯一神論的な解釋の繼承であり經緯であり而して體系化である。此のイデア論の唯一神論的解釋と而して

之によりて成立したる唯有一神論的イデア論と、従つて唯有一神論的イデアリスムスとが、少くとも、プロテスタント・ドイツのヘーゲルへまで連続している事を私は指摘して置かねばならぬ、というのは、アリストテレスの思惟の思惟たる純粹形相 *anylon eidos* の神の思想を以て *tattvam asi* であるとし、是れよりもより深いものを考えようと欲する事ができない所のヘーゲルが「絶対のイデア（形相）がフィロゾフィー（愛知）の唯一の對象であり而して内容である。此のイデアは一切の限定を自己自身の内に含んでいる<sup>(23)</sup>」とするのと、テオロギアは神からするもの而してフィロソフィアは神へ到るものとするトマス・アキナスが彼の知性であり純粹形相である所の神を以て「あらゆる限定をもつている所の唯一者」とするとの間に驚異すべき酷似性が有ると私には考えられるからである。

さて、右の如くであるとして、此の唯有一神論的イデア論の成立及び歴史の連続と是のヨーロッパ哲學史上の重大現象をして發足せしめたるイデア論の唯有一神論的解釋の出發及び展開との根本原因は何であるかと問われるならば、それはキリスト教哲學の成立とその持續的展開とであり而して此のキリスト教哲學は古代ギリシャ哲學との關係に於て原理的には全く新しき而して獨立なる哲學であつたが故と答えなければならぬであろう。換言すれば、それはユダヤ教を母胎とする所のキリスト教という、古代ギリシャ人の思惟とは原理的に全く異なる思惟の成立とその進展とその支配とであつたのである。勿論、私の此の立言は古い歌を歌つている事に過ぎないと或る人々によりて嘲笑せられるでもあろう。しかしながら、彼等にとりては何の新し味もない此の古い歌を私と私の如き者とは繰返さざるを得ないのである、というのは、よしや是れが古い歌であらうとも、これは我々には常に新鮮な意味をもつているからである。というのは此の見地に立つ事によりて始めてトマスやその他の人々の哲學や神學が我々には明瞭

(23) Hegel, G. W. Fr.: Wissenschaft der Logik, 3. Buch, 3. Abschnitt, 3. Kapitel (die Absolute Idee).

且つ判明に把えられるものとなるからである。

#### 4. ヒュペル・プューシズム的形相主義

さてトマスのイデア論はそれが彼の體系に於て占める位置よりして、またその系統論よりして而してまたその實體よりして右の如きものであるから、明かに彼のイデア論は言いうるならば、唯一神論的形相主義 *theistischer Eideticismus* のイデア論である。而してまた此の形相主義は、古代ギリシア人のプューシズムとの區別に於ては、ヒュペル・プューシズム *hyperphysism* の形相主義と言われ得る。それ故に彼のイデア論は此のヒュペル・プューシズムのイデア論である。斯くの如きイデア論を彼をして主張せしめる唯一神論的形相主義を「普遍的眞理」*catholica veritas* とする彼は、之に依りて、古代ギリシア人のプューシズムを全般的には斥ける。如何にもこれは理の當然である。しかしながら、そのプューシズムを根本類型とする古代人の哲學は其の内に質料主義 *hylicism*, *materialism* と形相主義 *eideticism* とを亞類型として含んでいるのである。此のプューシズムの質料主義をトマスは嚴に斥けている、此の立場の人々は總べてのものが或は偶然によりて或は自然の必然によりて生成するのであつて神を第一原因としない者であるからとの理由によりて<sup>(24)</sup>。故にトマスは斯くの如き立場を拒斥して「イデアは有り」*ideas esse* とするプラトーンを尊重する。しかしながら此のプラトンの形相主義はプューシズムの他の亞類型であるのみならず、斯くの如き立場からイデアは有りとするプラトーンはイデアは神の外にありとし、また質料は創造せられたものではなく、従つて質料のイデアを立てずして質料を以てイデアと並ぶ所の副原因 *concausa*, *xynaitia* としているのである。是れは明らかにトマスのヒュペル・プューシズムの形相主義には適合しない。それ故に彼はイデアは神の内に在り而して質料は神によりて創造せられたものであつて、それ故に質料はイデアを

(24) *De Ver.*, Qu. III, art. 1.

神の内にもつとするのである。<sup>(25)</sup>これは明かにイデア論の唯一神論的解釋であり、よりて以て彼はプラトーンをヒュペル・プューシズムへ轉位 *transposition* している。而して之を爲す事の彼の據點は既に轉位せられたるアリストテレスの純粹形相であり、純粹活動であり、知性であり、而して思惟の思惟即ち自己自身の認識たる神であつた。というのは彼は此のアリストテレスの神を「自己自身を認識する事によりて（自己自身より以外の）他のすべてのものを認識する」<sup>(26)</sup>とするのであるから。此のアリストテレス解釋には明かに問題が含まれており、之を鋭く突いているのは先ず『ギリシア人の哲學』の著者のツェレル<sup>(27)</sup>であり、現存の人としてはサー・デーヴィッド・ロス<sup>(28)</sup>である。プューシズムのアリストテレスの解釋としてはツェレル及びロスのが正確である。しかしトマスに必要であつたのは、此の兩者にとりてとは異なりて、哲學史的正確性にも増して唯一神論のヒュペル・プューシズムであつたのである。それ故にトマスは此の唯一神論の立場へアリストテレスを解釋し轉位し取入れたのである、勿論、これには彼の師アルベルトゥス・マーグヌスに於て而して依りて決定的となつたアリストテレス哲學の盛行という歴史的條件も亦考慮せられなければならぬ。しかしながら、トマスその人にとりては斯く有らねばならぬのであり、またトマスが正説者とせられてより後の者であつて而してトマスを信奉す者よりしても斯く有らねばならぬのである。それ故に私は之を唯一神論のヒュペル・プューシズムの立場であると言うのである。此の立場に立てば、選擇論的に必然に、エピキュリアニズムやエムペドクレスの如くに拒斥せらるべきものが、また他方に於てはプラトーンやアリストテレ

(25) S. Th., I, Qu. 15, art. 3.

(26) Thomae Aquinatis In Metaphysicam Aristotelis Commentaria, Liber XII, Lectio XI, § 2614.

(27) Zeller, Ed.: Die Philosophie der Griechen, 2. Teil, 2. Abteilung, S. 358 sqq. Leipzig 1921.

(28) Ross, W. D.: Aristotle's Metaphysics. Volume I, pp. cxxx-cliv: Introduction VI, Aristotle's Theology. Oxford 1924.

ースの如くに轉釋せられ攝取せられなければならぬものが區別せられ整理せられて來る。従つて更にまた他方に於てはカトリック・キリスト教内に於ても異説が或は異端が排除せられ攻撃せられなければならぬ事と成る。その著しい例はダーヴィド・デー・ディナンドーであり、彼は神を第一質料なりと主張したるが故に、あの冷靜なトマスによりて眞向から「狂氣によりて顛倒せる者<sup>(29)</sup>」と呼ばれている。彼は第 18 世紀の初頭頃からの術語によりては汎神論者と呼ばれているのである。此の汎神論者のうちに、勿論右のダーヴィドとは學說内容を異にしているが、數えられるヨハンネース・エリュージェナが、そのイデア論にかかわらず、トマスのイデア論の系統から除外せられている事に不思議は無い、というのは汎神論は唯一神論のヒュペル・プューシズムとは眞向から矛盾する主張なのであるから。というのは、後者は神を以て宇宙からは區別せられたる存在であるとするのに對して、前者は此の區別せられてある二つの存在を種々の意味に於て同一なりとするものであるからである。

## 5. ディオニューシウスの問題

さて斯くの如くに考察して來るとまたまた種々の諸問題が起つて來る、嚴密なる意味に於ての汎神論はキリスト教哲學の行われている處に於てのみ存在し得るものなのではないか、などと。しかし今茲では、就中、プセウド・ディオニューシウス・アレーオパギータへ注意を向けておかねばならぬ、というのは彼はトマスによりて、既に見たるが如くに、イデア論の見地からも重要視せられているのであるから。前に引用したるが如くに、トマスがディオニューシウスに極度に依頼していると言われる事は眞である。この事は『眞理に就いて』や『破異教徒綱要』や『神學綱要』などのうちで隨處に諸問題の決定的解決の依處としてディオニューシウスが、特に『神の諸名に就いて』が引用せられており、また此の書物にトマスが丹

(29) S. c. G., I, c. 17.

念なる注釋を書いている事からして知られるのである。しかしディオニューシウスはトマスが意味するが如き唯有一神論のヒュペル・プューシズムの形相主義者で果して純粹にあつたのであろうか。既に周ねく知られているが如くに、ヨハンネス・エリユーゲナの哲學の成立には此のディオニューシウスが大なる役割をつとめているのである。またディオニューシウスはトマスをも含む所の「スコラ神學」*theologia scholastica* をその根柢からゆさぶる所の「神秘神學」*theologia mystica* に多くの依處を與えているのである。而してそれは理の當然であつた、というのは此の神秘神學の人人は多くネオ・プラトニキの哲學に依るのであり、その限りではトマスが殆んど全く展開せしめなかつた所のアルベルトゥス・マグヌスの半面たるネオ・プラトニキの要素へ遡源するのであり、而して是等の人々に於けるネオ・プラトニキ的要素の淵源はアウグスティヌス、特にディオニューシウスであつたのであるから。というのは此のディオニューシウス・アレオパギータの名によりて著作したる失名の人がアウグスティヌスより後にキリスト教とネオ・プラトニキの哲學、就中、プロクロスの哲學とを結合したのであり、而してその失名の人が眞のサンクトゥス・ディオニューシウス・アレオパギータとして尊重せられ讃嘆せられたからである、早くに一度は此のディオニューシウスのとせられる著作群の偽書なる事が言われたのではあつたが。此處に於て此のディオニューシウスとプロクロスとの關係を考察するとき、第一に、トマスの神は「自己自身を認識する事によりて（自己より以外の）他の總べてのものを認識する」*intelligendo se intelligit omnia alia (a se)* という彼のイデア論の重要な側面の眞實の原型はプロクロスの主要源泉たるプロティノスのヌース<sup>(30)</sup>の思想に於て見出される事となる。というのは彼が古代ギリシア哲學の歴史のうちにて初めて決定的にプラトンの思惟せられうる神たるコスモス・

(30) Plotini Enneades: II, 9. 1; IV, 8, 3; V, 8, 4; V, 9, 8; V, 9, 10 sq.; VI, 7, 9 sq.

ノエトスとアリストテレスの「思惟の思惟」とを結合したのであつたから。この考え方は前に觸れられたアレクサンドリアのフィロンのホ・ノエトス・コスモスの捉え方に通う点を持つている事を否むことができないであろう。次に、第二に、『神の諸名に就いて』などから知られるディオニューシウスの思想のうちにはプロクロス思想と一致するものが多く見出されるのみではなくて、またブリハド・アーラヌヤカやチュハーンドーギヤなど重要なウパニシャッドの思想との一致も見出されるのである。<sup>(31)</sup>これは無下に或はまた黨派的に退けられえない問題を提出する。これは誠に困難な問題であるが、しかし何等かの方法によりて學問的に公正に解決せられなければならぬものである、というのはプロクロスには明かにインドの思想のうちの或るものが知られていたものであり、プロローティノスのエーヴォルーチャーとインヴォルーチャーとの思想はヴェーダーンタとの聯關を想定するとき初めて良く諒解せられるものとなるからである。かくて、第三に、以上の如き諸問題の現出は、先ず、トマスの思想の根柢にあるアリストテリズムとネオ・プラトニズムとの統一性に就いて問をおこさしめ、次に、ヨーロッパ哲學の、從來多くの人々によりて主張せられたる自己完結性に就いての問をまでおこさしめるのである。是等も亦困難な問題であるが、しかし困難なりとて回避せられてはならぬ問題である。

## 結 論

以上、私は與えられたスペースを守ることを心かけながら、トマスのイデア論に就いて考察して來た。或は私の言葉のうちには普遍的眞理の諸先生方の氣に染まぬものがあるかも知れないが、しかし私はトマスを過大にも過小にも把握したくないのである。元來、私は歴史的には世界哲學史

(31) Sancti Thomae Aquinatis In Librum Beati Dionysii De Divinis Nominibus Expositio. pp. 239-241. Marietti 1950.



の見地から而して體系的には比較哲學の見地からインド哲學をと共にヨーロッパ哲學を正確に把捉したいのである。此の小論は特にヨーロッパ哲學の正確なる把捉へ向けられているものである。而して私はヨーロッパ哲學の根本形態又は根本類型としてはギリシヤ人のプューシズムとキリスト者のヒュペル・プューシズムとを設定すべきであると考えている。此のヒュペル・プューシズムたるキリスト教哲學のうちにてイデア論が種々の形態を取りながら大なる役割をつとめていることを私は見るのである。然るにそのイデア論は古代ギリシヤ人のイデア論の唯一神論的解釋と言うに歸着する。勿論その解釋の種々なる形態のうちにはキリスト教神學乃至キリスト教哲學から見て肯定せらるべきものも否定せらるべきものもあると言う事となるであろう。しかし若し其等の根柢にキリスト教哲學であろうという意圖がある場合には、それ等を總括してキリスト教哲學のイデア論と見る事は必ずしも拒斥せられえないであろう。私は此の廣義のキリスト教哲學のイデア論が闡明せられねばならぬと考える者、而して此のキリスト教哲學のイデア論のうちにてトマスのイデア論を正確に把捉する事が決して無意義ではないと考える者である。而して此の小論は私の過去の研究と將來のそれとの備忘録の如きものであるが、これを機縁に諸賢の啓發を得れば私の幸たるや之に過ぎたるはない。<sup>(82)</sup>

(32) 二種のイデア論—比較哲學的研究—(東京大學教養學部人文科學科紀要, 哲學IV, 1956)を参照せられたい。此の紀要の論文は本誌の此の小論よりも後に書かれた拙稿である。